

令和3年度大台ヶ原自然再生推進委員会  
議事概要

1. 日時 令和4年3月3日(木) 13:30～16:30
2. 場所 オンライン会議
3. 参加者

【委員】

木佐貫 博光 三重大学大学院生物資源学研究科 教授  
佐久間 大輔 大阪市立自然史博物館 学芸課長  
高田 研一 高田森林緑地研究所 所長  
高柳 敦 京都大学大学院農学研究科 准教授  
松井 淳 奈良教育大学教育学部 特任教授  
村上 興正 元京都大学理学研究科 講師  
揉井 千代子 公益財団法人 日本野鳥の会奈良支部 幹事  
八代田 千鶴 国立研究開発法人 森林総合研究所関西支所 主任研究員  
横田 岳人 龍谷大学先端理工学部 准教授

【オブザーバー】

後藤 崇幸 近畿中国森林管理局 計画保全部 保全課 野生鳥獣管理指導官  
小林 正則 // 保護係長  
池内 麻里 // 計画保全部 計画課 企画官  
東 勇太 // 生態系保全係長  
役田 学 // 三重森林管理署 地域林政調整官  
兵頭 由浩 奈良県 食と農の振興部農業水産振興課 主任主事  
田垣内 政信 奈良県水循環・森林・景観環境部 景観・自然環境課 主任技能員  
窪田 哲蔵 // 主査  
滝本 義久 三重県農林水産部獣害対策課 捕獲管理班 班長  
福岡 孝太 大台町 産業課 主事  
森ノ内 圭治 奈良県猟友会 上北山支部 事務局  
安場 浩一郎 株式会社 スペースビジョン研究所 主任研究員

【事務局】

環境省近畿地方環境事務所	関根 達郎	所長
	木住野 泰明	統括自然保護企画官
	玉谷 雄太	国立公園課長
	丸山 永	国立公園課長補佐
	澤志 泰正	野生生物課長
	川口 佳則	野生生物課取引監視係長
	徳丸 久衛	生物多様性保全企画官
吉野管理官事務所	鵜飼 匠太	国立公園管理官
	丸毛 絵梨香	アクティブ・レンジャー
(株) KANSO テクノス	樋口 高志	環境部 マネジャー
	樋口 香代	環境部 リーダー

(一財) 自然環境研究センター	千葉	かおり	主席研究員
	中田	靖彦	主任研究員
	日名	耕司	研究員
	栗木	隼大	研究員

#### 4. 議事

- (1) 令和3年度大台ヶ原自然再生事業検討状況の概要報告
- (2) 大台ヶ原自然再生事業における令和3年度業務実施結果
- (3) 大台ヶ原自然再生事業における令和4年度業務実施計画(案)
- (4) 令和4年度大台ヶ原自然再生推進委員会及び関係ワーキンググループの開催予定(案)
- (5) その他

## 5. 概要：

- (1) 令和3年度大台ヶ原自然再生事業検討状況の概要報告
- (2) 大台ヶ原自然再生事業における令和3年度業務実施結果

### ■総括

- ・ 防鹿柵はニホンジカの採食圧を排除する効果があり、その中では植物の被度の回復や稚樹の生育が認められている。柵外でも経時的にみると、ニホンジカの生息密度が下がると、若干ではあるが植生の被度や高さが増加するという相関関係がみられる。しかし、ニホンジカの生息密度は植生を全面的に回復させるまでには低下していない。これまで、生息密度を低下させるために努力してきたが、ツキノワグマの出没等、様々な予測可能な障害もあった。その予測可能な影響を担保する必要があるということがわかってきたと思う。
- ・ ニホンジカの生息密度をまずは5頭/km<sup>2</sup>にし、さらにそれを下回るようにしないと植生の回復には不十分である。マニュアルを改定し捕獲圧を高めるような新しい試みを行って、来年度は捕獲目標頭数を達成し、生息密度が低下するようにしたい。
- ・ 利用の質の向上面で、近年はいろいろ取り組んでいる。登録ガイドを活用して大台ヶ原のことを理解してもらい利用の促進を図っている。まだ十分実を結んでいないが積極的に進めている。コロナ禍が収まったら効果が出てくるのではないか。自然再生事業の効果を利用者に還元していくことをもっと検討していくべき。柵の近くで植生の回復状況を見てもらうなど、具体化していく必要がある。利用部会を開催して何をすべきかのレビューが必要と思う。

### ■大台ヶ原自然再生事業における令和3年度業務実施結果について

#### 1) 森林生態系の保全・再生

- ・ 東大台小規模防鹿柵内の稚樹調査結果について、多くの自生稚樹が観察できたが、新たな実生の定着がみられないと書いてあるが、これは小さな稚樹がみられないということである。新たな定着があったかどうかまでは調べられていないのではないか。樹高が低くても樹齢が高い可能性がある。新しい稚樹が入ってきていないかどうかは分からない。
- ・ 成長過程、樹高によって実生、稚樹、幼木という表現もある。定義をはっきりさせておくこと。

#### 2) ニホンジカ個体群の管理

- ・ ニホンジカの生息密度を5頭/km<sup>2</sup>にすることがまずは必要であり、5頭/km<sup>2</sup>以下になった後、さらに何頭を目指せばよいのかという議論をしようとしていた矢先に生息密度が上昇してしまった。その結果、議論が先延ばしとなったが、進めなければならない。
- ・ 糞粒法とREM法の相関が得られなかったとあるが、調査の目的や方法が異なるので相関は得られないと思う。それぞれの調査方法の特徴を生かし、別の評価指標として位置付け、糞粒法は過去からの変化を把握する指標とし、REM法は季節変化や利用頻度が高い場所を把握して捕獲計画に反映するといった位置付けにした方がよい。次年度はそれらについて検討してほしい。
- ・ 相関が得られない原因は追究した方がよい。糞粒法からREM法への移行はしばらくは無理である。
- ・ 糞粒法とREM法、それぞれの調査の特徴を生かして、個体群変動を立体的に把握するとすればよい。
- ・ ニホンジカの生息密度が3頭/km<sup>2</sup>前後のS1では、スズタケの高さが10cm程度、生息密度が0頭/km<sup>2</sup>のS2では1mに近いので、3頭/km<sup>2</sup>もしくは2頭/km<sup>2</sup>以下に落とさないと難しいということではないか。

- ・ 平均的な密度で何頭以下にしないといけないと話すのではなく、柵外のどこで回復が始まるかを見ていく必要がある。
- ・ 捕獲個体のモニタリングのまとめの最後に、「餌資源の質や量が相対的に低下している可能性が考えられ」とあるが、特に第4期にかけて妊娠率が下がった原因を餌資源の質や量の変化としているが、西大台ではその期間に植生の急激な変化はなく、餌の質が変わったかどうかについてもデータがない。周辺環境も劣化して十分な餌が得られなかった要因も考えられる。
- ・ 妊娠率の低下については、糞の窒素含有量の変化をみると何かわかるかもしれない。糞を数年間貯めてから、解析を行うとよい。

### 3) 生物多様性の保全・再生

- ・ 種不明の頭数が多い自動撮影カメラは設置場所を変えた方がよいのではないかと。あるいは経年変化をみるために同じ場所に行っている等の議論はあるのか。  
→ニホンジカのカメラトラップ調査のためのカメラで撮影された動物をまとめており、そのような位置付けでよいのではないかと。
- ・ 「ニホンジカ以外の野生動物の撮影枚数」としてまとめているが、ニホンジカの撮影枚数も入れておいた方がよい。
- ・ 季節変化や経年変化等を解析してほしい。  
→推進計画の見直しにあわせて行うスケジュールとなっている。

### 4) 大台ヶ原全体の変化に関する調査

- ・ 特になし

### 5) 持続可能な利用の推進

- ・ 様々なイベントを開催しているが一過性になっている。コンテンツを貯めたものを作って今後何をしていくか、活かしていくか。戦略的にやらないと発展しない。改善して欲しい。
- ・ 利用協議会の内容についても事業実施結果の資料に含めておいて欲しい。
- ・ 西大台利用調整地区の当日認定が利用者増加につながっているのは良いことだと思う。手続きを簡素化して適正な利用を進めていって欲しい。手続きが煩雑という意見が出ていたが、手続きの簡素化について検討する項目があってもよいと思う。
- ・ 利用部会を開催してワイズユースに向けた議論をすべき。利用 WG だけの委員は大台ヶ原自然再生の現在の状況が分からない状態である。利用についてもしっかり検討して欲しい。協議会についてもこの委員会で報告すべきである。
- ・ 自然再生事業の中身を見せるツアーについて、大学の授業や公開講座で企画してコロナで中止になっているところである。環境省主催のガイドウォークも同様である。来年度、大阪府の理科の教員が研修として自然再生事業を見るという動きもある。自然観察会でもそのような機会を設けるべきである。手続きをすれば、多様な主体が利用できるような基準を作って進めて欲しい。

(3) 大台ヶ原自然再生事業における令和4年度業務実施計画(案)

(4) 令和4年度大台ヶ原自然再生推進委員会及び関係ワーキンググループの開催予定(案)

## ■大台ヶ原自然再生事業における令和4年度業務実施計画(案)

- 1) 森林生態系の保全・再生
  - ・ 特になし
- 2) ニホンジカ個体群の管理
  - ・ 「②生息状況調査」に「利用状況」と「生息状況」という言葉があるが、利用という言葉は人の利用の意味にもとれる。  
→「シカの利用状況」に統一する。
- 3) 生物多様性の保全・再生
  - ・ オオダイガハラサンショウウオ調査で、環境 DNA も調査するのであれば、サンショウウオ類全般、また、アライグマなど哺乳類も調査してほしい。
- 4) 大台ヶ原全体の変化に関する調査
  - ・ 特になし
- 5) 持続可能な利用の推進
  - ・ 教育機関との連携の部分について。シカ問題について取り組んでいる人も含めて連携が取れないか。林野庁の職員研修など、関係行政とも人材育成のために連携して欲しい。

■令和4年度大台ヶ原自然再生推進委員会及び関係ワーキンググループの開催予定（案）

- ・ 推進計画の評価をするのであれば、利用 WG を先にやるべき。利用の WG 委員にも情報提供を積極的にすべきである。
- ・ 利用部会、利用 WG は必要である。
- ・ コロナという事態が生じた中で、利用について大きな変化が起こりつつあることに対して委員会としてどのような対応をとるべきかを議論する場がない。国立公園の利用に対しての体制が変わってきている。それについて議論をしなくてよいのか。協議会で一部の団体が脱退して変化が起こっている。このような変化を共有しないままでよいのか。大台ヶ原を含めた紀伊山地をどうするのか、そのようなことを考える場がなく検討が止まったままでよいのかと思う。このまま惰性で続けるのではなく、積極的に考えるときであると思う。
- ・ 国立公園の見直し、エコツーリズムの促進などが進む中、議論する場が必要だと思う。

(5) その他

- ・ これまで蓄積されてきたデータは報告書の形では出ているが、研究者の目につくような論文のような形で出されていない。これまでに取得したロングタームのデータを研究者に公開して一緒に研究していくという動きも進んでいる。そのようなことを考えて欲しいと思う。